

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520451

研究課題名(和文)中国東南方言におけるヴォイスの構文ネットワークに関する研究

研究課題名(英文)A Study of Voice Network in Southern East China

研究代表者

佐々木 勲人(SASAKI, Yoshihito)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：40250998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：中国東南地域の諸方言におけるヴォイスに関わる構文間に形成される様々なネットワークの在り方を詳細に記述するために、『東南方言比較文法研究』(2002年、好文出版)の枠組みに基づいて、客家語と粵語のデータを収集し、方言類型論の観点から分析を行った。また、認知言語学的な観点から中国語の受動文、受益文、使役文、処置文において認知の主体である話者がどのように言語化されるかを考察した。その結果、中国語は話者を言語化していく傾向が強く、客観的事態把握を好む傾向が明らかとなった。従来の研究が個別に取り上げてきた現象に、主観性という観点を導入することによって、統一的説明を与えることが可能となった。

研究成果の概要(英文)： We described various networks formed between the voice-related construction in the dialects of Southeast China. We collected data of Hakka and Yue dialect and analyzed from the viewpoint of dialectic typology theory.

In addition, from the viewpoint of cognitive linguistic, we examined how speakers who are subjects of cognition in passive, benefactive, causative, disposal construction will be represented. As a result, the tendency of Chinese to represent a speakers is strong, and it became clear that the tendency to prefer objective construal. It was possible to give a unified explanation by introducing the viewpoint of subjectivity into the phenomenon which the conventional research has taken separately.

研究分野：中国語学

キーワード：中国東南方言 受動文 使役文 処置文 受益文 客家語 主観性 事態把握

1. 研究開始当初の背景

莫大な使用人口を抱える中国語は、広大な国土の各地にさまざまな方言を形成している。比較的均一性が高いと言われる北方地域に対して、東南地域には性質の異なる方言が数多く存在する。北方方言を中心とするこれまでの文法研究に新たな視点を提供するという意義において、東南方言に関する研究は、近年の中国語文法研究においてその重要性がより一層高まっている。

2. 研究の目的

本研究は、中国東南地域の諸方言における受動文や使役文、処置文、受益文など、ヴォイスと呼ばれる文法範疇に関わる構文間に形成されるさまざまなネットワークの在り方を詳細に記述することを目的とする。北方方言の北京語のみを分析の対象とする従来の研究が看過してきた新たなヴォイスの構文ネットワークの存在を明らかにし、そこに見られる文法化や意味拡張のプロセスを方言類型論の観点から解明する。

文法化とは、もともと実質的内容を表していた言語単位が、時間の経緯にしたがって機能語としての文法的役割を担うようになる歴史的变化と定義される。このような定義に従えば、共時的なデータのみを扱って文法化を論じることは許されないことになる。だが、そもそも中国各地の方言を研究対象とした場合、歴史的に遡って口語資料を入手することは不可能に近い。しかし、だからといって方言文法が文法化の問題を論じられないということにはならないであろう。

例えば、受益前置詞から処置前置詞への文法化は東南地域において広く観察される現象であるが、広州(粵語)や美濃(客家語)のようにそうした変化がまったく起こっていない地域、あるいは寧波(呉語)や梅県(客家語)、大埔(客家語)のように発達途中の段階を示す地域、さらに福州(閩語)や廈門(閩語)、桃園(客家語)のように高度な文法化を遂げている地域など、それぞれが異なった文法化の段階を示している。つまり、各地の方言資料は文法化のプロセスのさまざまな段階を我々に提示しているのである。こうした複数の地域の方言資料を総合的に分析するならば、共時的な方言資料に基づいて、文法化のプロセスに合理的な説明を与えることは十分に可能である。

かつて橋本萬太郎博士は『言語類型地理論』(1978年:弘文堂)の中で、「ヨコの変容(latitudinal transition)が、古代から現代語への統辞法の変化というタテの変化(longitudinal change)に対応する」ことを提唱した。当時に比べて方言調査の環境が整い、より正確な記述ができるようになった今日、それを実証することは十分に可能である。一般に歴史的なアプローチのみが許されるところがちな文法化の現象に対して、共時的な方言資料に基づいてそのプロセスを

解明することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

中国東南地域の諸方言におけるヴォイスに関わる構文間に形成されるさまざまなネットワークの在り方を詳細に記述するために、『東南方言比較文法研究』(好文出版、2002年)の枠組みに基づいて、客家語と粵語のデータを収集し、方言類型論の観点から分析を行った。さらに、認知言語学的な観点から受動文、受益文、使役文、処置文に関する中国語の事態把握の特徴について考察した。

4. 研究成果

本研究の成果はおもに以下の3点に集約される。

(1) 中国東南方言文法の記述的研究

はじめに『東南方言比較文法研究 寧波語・福州語・廈門語の分析』(好文出版、2002年)で提示した31の文法項目に基づいて、インフォーマントの協力を得ながら各項目の例文を客家語と粵語に置き換える調査を行い、両地域の概要を記述した。

客家語については、台湾北部桃園のデータを収集し、福建省連城や広東省梅県の客家語と比較しながら、その文法的特徴について考察した。粵語については、広東省広州のデータを収集し、客家語や閩語、呉語との比較を通して考察を行った。調査結果については現在論文を投稿準備中である。

(2) ヴォイス構文のネットワークに関する研究

・受益から処置への文法化

同一の形態素が受益者と処置対象の両方を導く現象は、呉語、徽語、閩語、客家語など東南方言の各地で観察されており、この地域の処置文の重要な一類型となっている。本研究は、文法化の観点からこの問題に関する分析を行った。

呉語の寧波語、福州語や廈門語の閩語、さらに本研究が調査を行った桃園の客家語などを詳細に分析した結果、この種の処置文の成立には性質の異なる二種類の文法化が関与していることが明らかとなった。一つは動詞から随伴前置詞を経て受益前置詞へと至る脱語彙化のプロセスであり、もう一つは受益前置詞が処置前置詞に拡張する多機能化のプロセスである。

・使役から受動への文法化

授与動詞が使役文と受動文の両方を構成する現象は、東南方言の各地で観察されており、この地域の受動文の特徴の一つとなっている。本研究は、文法化の観点からこの問題に関する分析を行った。

モノの授与を仲立ちとする授与使役が許容使役へと拡張し、そこから受動が成立するプロセスについて、各地のデータをもとに無理のない説明を与えた。また、このような文法化が東南方言に限って観察されること、即

ち北方方言では観察されないのは、東南方言には北方方言の“让”に相当する放任使役のマーカが存在しないことに原因があることを明らかにした。

・授与から受益への文文化

東南方言では授与動詞が受益者を導く前置詞に文文化を遂げていない。北方方言との対比において重要な特徴であるこの現象を各地のデータをもとに指摘した。

一方で、“买一本书给你”のような、授与動詞を用いて受取手を文末に表示する形式は、東南方言だけでなく北方方言においても観察され、中国語として汎用性の高い文法形式であることを指摘した。

(3) ヴォイス構文と主観性に関する研究

文を発話する存在である話し手(話者)は、事態を把握しそれを言語化していく認知の主体でもある。従って、発話の中には話者の立場や態度、感情などが少なからず反映されている。認知の主体である話者が発話の中でどのように言語化されているかは、話者が事態をどのように把握したかを知る上で重要な手掛かりとなる。

話者による事態把握には、主観的把握(subjective construal)と客観的把握(objective construal)という二つの類型があると考えられている。池上(2011)は二つの類型を次のように規定している。

主観的把握：話者は問題の事態の中に自らを置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする

客観的把握：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする

日本語は英語に比べて主観的な状況把握を好む、即ち主体化の度合いが高い言語であると言われる。例えば、話者の欲求を表す(01)において、英語では一人称を用いて話者を言語化しなければならないが、日本語ではあえて言語化しないのが普通である。

(01) a. I want water.

b. 水が欲しい。

c. ?私は水が欲しい。

主観的把握を好む日本語では、話者を基点として事態を観察していく。その際、話者自身が観察の対象となることはなく、言語化されることはない。話者の背景化(ゼロ化)とは、きわめて主観性の高い事態把握であると言ってよい。これに対して、客観的把握を好む英語では、話者は主語として前景化され、必ず言語化される。日本語では「主語の省略」が好まれるとよく言われるが、そこには主観的把握への強い傾斜が反映されている。

一方、中国語では話者は言語化されるのが一般的であり、この点では英語と共通している。中国語は英語のように文法的に必ず主語を要求する言語ではないが、話者である“我”が言語化されない(02b)はかなり不自然である。

(02) a. 我要水。

b. ?要水。

また、日本語では「欲しい」のような内的状態を表す述語は、そのままでは3人称には使えない。内的状態を直接知覚できない場合は、それが話者の推測であることを示す「～がる」を伴う必要がある。

(03) a. 水が欲しい。

b. *彼は水が欲しい。

c. 彼は水を欲しがっている。

中国語においてそうした人称の違いが問題になることはない。この点も英語と共通している。

(04) a. 我要水。

b. 他要水。

(05) a. I want water.

b. He wants water.

一方で、中国語と英語が必ずしも一致せず、むしろ日本語との共通点を見せる現象もある。場所を尋ねる次の(06)において、英語では話者を前景化して言語化するのに対して、日本語では場所が前景化され、話者を言語化することはない。

(06) a. Where am I?

b. ここはどこですか。

この点において、中国語は日本語と一致している。話者を言語化した(07a)は明らかに不自然であり、場所を前景化した(07b)が用いられる。

(07) a. *我在哪儿?

b. 这是什么地方?

このように中国語では、ある部分では英語と同様に話者を前景化した客観的把握が行われる一方、ある部分では日本語と同様に話者を背景化した主観的把握が行われる。どのような現象において主観的把握が好まれ、どのような現象において客観的把握が好まれるのかという問題は、中国語における主観性の研究の重要なテーマの一つとなっている。

本研究では、おもに日本語との対比から、受動文や使役文、受益文などヴォイスと呼ばれる構文において、言語主体である話者がどのように言語化されているかを観察することによって、客観的事態把握を好む中国語の特徴を明らかにした。

中国語では、受身文の多くが不如意の意味を表すことが知られている(马真 1981)。

(08) a. 衣服被他撕破了。

b. 饭被我煮糊了。

c. 自行车被小偷偷走了。

d. 麦子被雨淋了。

(09) a. *衣服被姐姐做好了。

b. *饭被我煮好了。

c. *自行车被我领回来了。

d. *麦子被太阳晒干了。

また、感情表現には使役文が好んで用いられる(大河内 1991)。

(10) a. 刚刚大家说的,真叫我失望。

b. 这个消息让我很高兴。

c. 马老的一番话使我很感动。

日本語の補助動詞の「テクル」や「テクレル」のような、行為が話者に向けて行われることを示す文法標識の使用は任意である。

(11) 他给我打(来)了一个电话。

(12) 小王送(给)我一本书。

従来のヴォイス研究において個別に論じられてきたこれらさまざまな現象について、主観性という観点を導入することによって統一的な説明を与えることが可能となることを指摘した。

<引用文献>

池上嘉彦 2011 日本語と主観性・主体性, 『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』, 澤田治美編, pp.49-67, ひつじ書房

马真 1981 《简明实用汉语语法》, 北京大学出版社

大河内康憲 1991 感情表現と使役構文, 『中国語』11, 12月号, 『中国語の諸相』所収, pp.149-160, 白帝社, 1997年

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

佐々木勲人、恩恵授与と事態把握、楊凱栄教授還暦記念論文集、朝日出版社、査読無、2017、pp.355 - 366、

佐々木勲人、汉语被动句の主観性、汉语语言学日中学者论文集 纪念方经民教授逝世十周年、好文出版、査読無、2015、pp.190 - 197、

佐々木勲人、語态句式の主観性 从話者の言語化出发、中国語文法研究、朋友書店、査読有、2014、pp.1 - 13、

佐々木勲人、ヴォイス構文と主観性 話者の言語化をめぐる、木村英樹教授還暦記念 中国語学論叢、白帝社、査読無、2013、pp.315 - 331、

[学会発表](計6件)

佐々木勲人、日本語の見方、ベトナム語の見方、日本語学部講演会、ベトナム社会主義共和国ホーチミン市：ホーチミン市師範大学、2017年2月17日

佐々木勲人、間接受身の日中対照、日本語文学共同シンポジウム、中華人民共和国北京市：中国人民大学、2016年12月10日

佐々木勲人、対事態把握的中日対比研究、外国語学院講演会、中華人民共和国四川省成都市：电子科技大学、2016年3月26日

佐々木勲人、事態把握の日中対照、日本文化経済学院学術講演会、中華人民共和国陝西省西安市：西安外国語大学、2015年9月23日

佐々木勲人、汉语被动句の主観性、2014年汉语语言学日中学者学研讨会、大阪市北区：大阪大学中之島センター、2014年11

月24日

佐々木勲人、受身をどう教えるか、中国語教育学会夏季セミナー、東京都新宿区：早稲田大学早稲田キャンパス、2014年8月24日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 勲人 (SASAKI, Yoshihito)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：40250998